

大賞

結衣公記

仲手川純一

文化祭の出し物についての話し合いで、バカな男子（岡本とか鈴木らへん）が推した「ゲイカフェ」が担任の真野によって即却下されて、「なんかない？」と隣の席の平野さんが言ってきたので、祭（地元では祭と言えば天王祭り、神社と言えば津島神社で公園と言えば天王川公園のことなので覚えておいて欲しい）の時に叔父さん（母の弟）が「信長が祭りを見た」という記録がある、という話から昔、信長の家来だった人が書いた『信長公記』という書物に津島がでてくるという話になり、現代語訳もでて図書館にあると聞いて借りて来てパラパラめくってみたら「津島の堀田道空邸の庭で信長が天女のコスプレして踊った」という記述があったので、それ再現したらいんじゃない？と言ったらなぜか平野さんのテンションだだ上がりで、一気に『信長のコスプレダンスパーティー』に決定してしまっただけだ。

「それで結衣、どうすんの？」と昼休みに親友のエリちゃん（かわいい）が聞いてきたが、こちらとしては特にアイデアもない

のだけど、ていうかここは平野さんが仕切るべきなんじゃないの？と思っただがガリ勉キャラの平野さんがここで大活躍できるとも思えず、とりあえず、

「まずは信長役、決めなかんわ」と言ってみた。

「やっぱイケメンだよ。信長」

「そりゃあイケメンじゃな盛り上がりかんわ」

「ほんならうちのクラスの男子じゃいかんがね」と言うので、

「イケメン知つとる？」と尋ねたら、

「おる。一年の森君、サッカー部！」とエリちゃんのテンションも上がってきた。

「間違いないイケメンだわ」

「知らんわ。でら？ だら？」

「どらだわ」

「・相だがね」というやり取りがあった。

それで放課後森君の教室まで見に行ったのだが、はたして森君は確かにアイドルのようなイケメンだった。ふとエリちゃん

を見ると、森君を見るその目が「はあと」になっていて「かわいいな」と思った。よし、森君はエリちゃんに任せよう。

お風呂に入った後に叔父さんとラインした。

叔父さんは私と同じ高校をでて東京の大学に行ったものの卒業後は仕事が続きせず（母曰く子供の頃からメンタルが弱い）職を転々としてフリーターみたいな感じで生きていたのだが、昨年祖父が亡くなって、祖母の世話のために帰ってきて、祖母の病院の送り迎えとか庭の片づけなんかをやつて、たまにバイトしたりしてなんとなくブラブラしているダメ人間で、またビジュアルが少々キモオタ風ということもあり、母は私が叔父さんと話したりするのを好ましく思っていないようだが、特にエロい目で私を見てくるような感じもなかったのでたまにラインしたりしている。（電話は叔父さんが苦手らしいのではない）

「今日思いついたんだけど、神社の横に『堀田家住宅』ってあるが？」

「おう。あれ昔は堀田邸って言っとったがな」

「あれって堀田道空の家？　っていうか堀田道空って誰？」

「なんか美濃の斎藤道三の家来らしいよ」

「美濃って岐阜でしょ？　遠いがね？」

「昔はそういうのあったらしいよ。知らんけど」

「ふーん。ほんで堀田家住宅がその道空さんの家なの？」

「ちゃうだろう？　あれは江戸中期だで。時代が合わんでかわ。ほんでも親戚とかじゃねえか？　四家七苗字って聞いたことあるか？」

全然わからなかったのでネットで検索しまくった結果、かなり津島に詳しくなった。

中世、津島は有力土豪による自治領のような感じだったようで、そこへ織田弾正忠家（この意味がわからないけど信長の家系らしい）が攻撃して、後に和陸して信長の一族に従う感じになったっぽい。それでなんか津島は当時は湊町でめっちゃお金持ちだったみたいでその資金を利用して、信長のお父さんがメインの織田家を圧迫して尾張で勢力を伸ばし、そこから家督を継いだ信長の天下統一の夢が始まったみたいだ。

なんか信長のお父さんがすごい！　と思った。お父さんががんばったおかげで信長が夢を見れたような気がする。例えば豊臣秀吉みたいな裸一貫スタートだったらどうか。信長は信長公になれたんだろうか？

昼休みにお弁当を食べながらエリちゃんがニヤニヤしているので何事かと聞いてみたら、信長役の交渉と称して森君とラインを始めたのだそうだ。なんとというか「今が人生のピークです！」という空気を全身から発していて眩しい。

「ほんで森君、信長役はオーケーなの？」

「うん。ダンスは自信ないって言っとったけど、一緒に練習しよう！　って」

「ええがね。ロマンスの予感だがね」

「なんか文化祭に向けて盛り上がってきたね」

盛り上がるとるのはあんだだけだわ、とは言えなかった。私にはそういうところがある。

月曜日のホームルーム。担任の真野が教室に入ってきて言った。「仮装ダンス大会は中止と職員会議で決まりました。最近LGBTとか問題になつとるで・高校の文化祭にはふさわしくないで」

これにはなんやかんややる気になっていた男子たちもどよめいていたけど、とは言えわざわざ職員室に抗議に行くようなパッションを持っている人もおらず、「信長コスプレダンスパーティー」計画は完全に白紙となり、結局クラスの真面目グループ主導で「LGBTが抱える社会課題についての展示」をやるということになった。あらあら。

「ええんか？」と叔父さんのライン。

「うん、まあしようがないよ」

「ほうか。どうしてもやりたかったら戦ったほうがええぞ」

「ええんだわ。別にそんな執着しとらんで」

「ほうか。まあ今回は結衣のターンじゃなかったってことか」

「うん」

「まあそのうちええ風ふくで。ええ風吹いたらつかまえたってちよう」

「何それ？」

「人生には何回かええ風吹くで」

「ふーん・叔父さんにも吹いた？」

「え・・・」

やばい！　触っちゃいけない叔父さんのデリケートゾーンだったか？

「吹いたよ」

「え？　吹いたの？」セーフや・・・

「ちよいちよい吹いたんだわ。思い返せば。それをワシは逃してきたんだわ。痛恨でござる」

「ござる（笑）」

「年とともに吹かんくなるで。ワシもちよつと前まで高校生だったのに、いつのまにかもうアラフォーだがや。高校入ってすぐに勉強ついてけんくなつて、そつからずとうだつ上がらんがや。巻き返せんうちに周りも自分みたいな奴ばかりだわ。仕事で会った同世代の人が突然死とかある。親が死んでも金なくて葬式だせんかった奴もおる」

「ほう」そうなのか・・・

「結衣は『今風吹いたかな？』って思ったら全部行ってちよう。

グイって行つてちょう。ほんで豊かな人生にしてちょうよ」

「はあ・・・了解」とかわいいいネコちゃんのスタンプも押ししておいた。

次はエリちゃんだ。

「森君怒つとつた？」と聞く。

「ううん。しょうがないって」

「ほんならよかつたわ」

「うん。それで、今度の日曜なんだけど」

「何？」

「森君の友達がなんか歴史オタクで、堀田家住宅見たいって」

「行つたことないかな？」

「名古屋の子らしくて」

「ほうなんだ。名古屋の高校落ちたんかな？」

「知らんけど。そんなもんで日曜日に森君とその友達と三人で見に行つたって欲しいんだわ」

「ええけど。エリちゃん来んの？」

「模試だもんで。名大模試」

「え？ 名大受けるの？ ってゆうか、うちらまだ二年だが？」

「三年からじゃ間に合わんがね」

「ほうなんか。全然知らんかつたわ」

「うん。人生かわいいだけはいかんて」

なんと！ この人からそんな台詞が放たれるとは！ エリちゃん

ん、恐ろしい子。

「エリちゃんかわいいだけじゃなかつたんだ」

「おうよ！」

「キャラおかしなつとるよ」

「だもんで、森君？ 正直ラインやつとつてもおもしろいんだわ。バカっぽいっていうか」

哀れ森君・・・なんかごめん。

「だもんで結衣、あんたよかつたら付き合つたりゃあ。それか友達のオタクか・・」

ちようどいい気候の日曜日。正直面倒臭かつたが元はと言えば私の発案で始まつたことであるため、今日はしっかりとお世話させていただきまっしょい！ と神社の南門のどこにある交番の前で待っていると、森君が自転車に乗つてやつてきた。ひとり。

「ああ結衣先輩、どうも」

「どうも・・友達は？」

「それがなんかおなか痛いつて・・」

「そうか・・ほんならどうする？ たこ焼き食べて帰る？」

「せっかく来たもんで・・見ていきます。俺も見たことないんで。あ、たこ焼きも食いたい・」

というわけで神社でお参りしてから二人で見学することにした。

勝手口？ のところに「堀田」と書かれた暖簾がかかっていて堀田木瓜といわれる家紋が描かれていてカッコいい。ちなみに津島神社の神紋は織田木瓜という織田家の家紋と同じデザインだ。

三百年前に建てられたとは思えない綺麗さで、私は特に台所のカマドがカッコよくてグッときてたのだが、森君はそのへんあんまり興味ないみたいだった。

「結衣先輩の家、津島でしょう？」

「そだよ。近所だわ。だもんでここも小学校の時に社会科見学できとるよ」

「ふうん、じゃあ南朝だ」

「え？」

「俺、佐屋だもんで、北朝だで・・・」

佐屋というのは今は合併で愛西市という名前になっているけど津島のすぐ南隣にあつて、うちの高校も津島と佐屋のちょうど境あたりにあるのかかなり身近な存在なんだけど、北朝とか南朝とかはよくわからない。

「何それ？」

「知らんの？」

「全然知らんわ」

「なんか南北朝時代？ に、南朝の皇子が追われて逃げてきて、北朝方の佐屋の侍が殺そうとした時に南朝方の津島の侍が助け

たつてというのが天王祭りの由来つて、お腹痛い友達が言っとつたよ」

「ふうん、全然知らんかった。うち先祖代々津島つてわけじゃないで・・・」

「そうなんだ」

「ほんで森君とは佐屋の侍の子孫なの？」

「いや、先祖は農家だもんで・・・」

「ほうか」

「だもんで津島の人と佐屋の人が付き合つたらなんかええかな？ つて思つて・・・」

「ロミオとジュリエットか」

「うん」とはにかむ森君。ロマンティックか！ 森よ！

「エリちゃん今日模試だもんで。残念やったね」

「いやー実はエリ先輩はあんまり・・・話合わないつていうか・・・むしろ僕的には結衣先輩のほうが・・・」

あれ？ これ告白？ なんか森君ジャブ打ってきたの？ 森ジャブなの？ 告ジャブなの？ これがおじさんが言つてた風か？ グイつて行く時なのか？ 落ち着け私！

外に出て砂利の敷かれた庭を歩く。白い外壁がカッコいい。屋根にうだつが載っている。

「あれ、『うだつ』だわ」と自分を立て直して言った。

「え？ うだつ？」

「うん『うだつが上がらない』とか言うが？ あれが語源だが」

「へー。そうなんだ。あの槍みたいな奴？」

「いや、その左、っていうか奥。屋根の上になんか鳩時計みたいなもの付いとるが？」

「あー、あれね」

「あれ、飾りだで、高いんだって。お金持ちじゃないと付けられないのかわ」

「ほーん」

「うん。森君、顔まあまあいいけど、それだけだがね。伸びしろないでしょう？」

「え？」

「このままだと伸びてかんでかんわ。うだつ上がらんくなるで」

「そうなの？ やばくない？」

「うだつ上げてかなかんわ。信長みたいになりたいでしょう？」

「どうすればええなの？」

「成績ええなの？」

「全然あかんわ。赤点だわ」

「ほーん・いかんがね。ほんであんた彼女おるんか？」

「・・おらんけど・頭悪いのバレとるでかんわ」と言つて森君はちよつと私を見た。彼女おらんで、あんたを彼女にしたい、そういう顔だった！

これ絶対風吹いとる。私は裸一貫じゃない。お父さんとお母

さんがくれた、健康な身体とまあまああの顔とそこそこの努力で蓄えた知力と、あとダメな叔父さんがくれたアドバイスもある。これは逃しちゃう駄目な風だ。

「・ほんなら私が勉強教えたるわ。そんで彼女になったるわ」

「え？ ・・・ええの？」

「ええよ」

「じゃあ・・よろしくお願いします」

なんとという僥倖！

「毎日ラインして」

「うん・・なんか結衣先輩、グイグイ来るね」

「そつちのほうがあええでしょう？」

「うん・・あのさ」

「何？」

「結衣って呼んでもいい？」

「いかんわ・・私県大行くで、あんたも受かったらええよ」

「はい」

「ほんならたこ焼き食べに行こか」

グイって行つたら風掴めた。

こうやって、今もつづく私の長いピークが始まったんです。

〈了〉

大賞

ダナモさん

寅間 心閑

東京から津島に越してきたのは三ヶ月前。お正月が明けた頃だった。成人式の日には、本町筋を振袖姿の女の子たちが歩いてきた。綺麗だな。そう思うだけで、不安な気持ちが少し和らいだ。

そう、私は不安だった。知らない土地だから、は理由の半分。もう半分は無計画のせい。二十五歳にしては、ちょっと感情的だったかもしれない。別れた男を追いかけて、私は東京を飛び出した。

秋口に名古屋へ一人旅をした男は、新しい恋を見つけて東京へ帰ってきた。一緒に行けばよかった、と悔やむのも馬鹿らしい。男は良くも悪くも隠し事のできるタイプではなく、十一月になる頃、一方的に別れを切り出された。ごめん、と頭を下げるなんて卑怯なやり口だ。こっちには為す術もない。通い慣れた男の部屋で取り乱してはみたが、結局「また脱皮しちゃったんだな」と納得するしかなかった。

付き合いたての頃、前の恋人について尋ねたり妬いたりする

と、男は「もう覚えてないよ」と面倒くさそうに答えた。もちろん、それでは引き下がれない。手を替え品を替え粘ろうとする私に、「蟬や蛇が脱皮するのと一緒だから」と付け加え、それ以上は取り合ってくれなかった。

後日、「脱皮」という喩えに何人かの女友達が感心し、私もようやく納得できた。成長する為に脱ぎ捨てた皮。そんなものに嫉妬したって仕方ないじゃない、と。

でも実際に自分が「そんなもの」になってみると、話は全然違う。嫉妬さえされない立場だと理解はしているのに、どうしても受け入れることが出来なかった。

すぐにでも名古屋市内に引越すつもりだと、泣きじゃくる私に男は告げた。二十七歳・フリーターのフットワークは軽い。要らなくなった皮は、東京に脱ぎ捨てるつもりだったらしい。隠し事の出来ない男は、悪意がないから残酷だ。

泣きじゃくりながら、私は迷うことなく引越そうと決めた。フリーターなのはお互い様だ。そんな決心に気付かない

男はハンカチを押し付けた。まるで涙の理由が他にあるように、「ほら」と困ったような声で。

ハンカチを受け取ると、優しく頭を撫でられた。一瞬、涙の理由が他にあるような気持ちになり、慌てて「そうじゃない」と思い直す。そんな自分に苛立ち、男にも苛立った。あの時、私の悲しみは変質したのかもしれない。男の匂いがするハンカチに埋めた顔は、ぞつとするほど無表情だったはずだ。

一ヶ月後、津島に三日間滞在して今のアパートを契約した。当然、男には内緒だ。同じ名古屋市内にいなかったのは、脱ぎ捨てられた皮のつまらない意地だったかもしれない。後を追ってきたことを、そして私がそんな女だということを知られたくなかった。あまり近くに住むと、そのうち見つかってしまう――。そう考えるくらいは冷静だった。

名古屋駅まで電車で三十分。そんな条件の中から津島を選んだ。県内以外にも岐阜や桑名など候補地は多数あったが、決めるのに時間はかからなかった。感情的になると、妙な勢いがつくのかもしれない。

私の母親の旧姓は「ツシマ」だ。

津島での初日は慌ただしく、そして寒かった。街にはまだ正月の雰囲気が残っていたことを覚えている。

東京から運ばれてきた荷物を部屋に入れ、ダンボール箱を押

しのけて玄関までの動線をつくり、市役所で諸々の手続きを終える日が暮れていた。一旦家に帰り、初めてシャワーを使う。さすがに料理を作る気にはなれなかったので、財布だけを持って外に出た。

部屋着のスウェットにジーンズを履き、長いダウンコートを羽織る。ラフな格好だから、あまり派手な店には入りたくなかった。けれど引越し初日だから、ラーメン屋やチェーン店の居酒屋ではどこか味気ないし、カフェでは少し物足りない。いや、そもそもお酒を置いていないし……。

一月の寒さに肩をすくめつつ、見慣れない街を歩くこと二十分弱。ようやく、ちょうどいい店を見つけた。

県道を脇に入った道すがら、擦りガラス越しに灯りが漏れている。ただ、中が覗けないので入りづらい。東京だったら、きつと素通りしていただろう。でも思い切って入れたのは、寒さに耐えきれなかったからではない。表のホワイトボードに書かれた「ひとり鍋あります、女性の方歓迎!」という文字のおかげだ。店に入った瞬間、眼鏡が曇る。何も見えないけれど、「いらっしやい」という御主人の声と、美味しそうな匂いにホッとした。それがこの店、現在の職場だ。世の中、何が起るか分かりはしない。

※

居酒屋「悠々」はカウンターだけ、そして常連客だけの小さ

い店だ。五十代の店主夫婦と一人娘で切り盛りしていたが、半年ほど前に娘は大阪へ行ってしまったらしい。

私は彼女の担当だったランチ営業と夜の本営業、そして閉店後の後片付けを任されている。つまり、一日中ずっとだ。引越してきたばかりのフリーターにとつては、本当にありがたい。

ランチは朝十一時から三時間。夜の閉店は夕方四時半。午後九時になると、店主夫婦は店のすぐ裏にある自宅へ帰るので、そこからはドリンクしか注文できない。そして午後十時になると会計を済まして速やかに帰宅——。常連客たちは、このルーをきっちり守っている。呑んでいる時は賑やかな人が多いが、泥酔するような人はいない。

そんな店だから、初めて入ってきた私は質問攻めにあつた。確かに店の外観は観光客向けではない。けれど二年振りの一見客になるとは思ってもみなかった。

東京から引越してきたばかりということ、二十五歳のフリーターだということ、津島、というか愛知県について何も知らないということ……。別れた男の後を追つて、という理由以外は問われるがまま答えたと思う。

その時、隣に座っていたのがダナモさんだ。五十代、六十代ばかりの客の中で、一人だけ群を抜いて若かったのでよく覚えていた。多分三十歳くらい。ずっと瓶ビールを飲み続け、たまにウーロン茶をもらっていた。

店内に音楽はない。テレビが一台、神棚に並んで置かれているだけだ。内心その絶妙な音量に感心していた。誰も喋らなければ音は聞こえるが、誰かが喋り出せば聞こえなくなる。気がけばそんな雰囲気と段々と慣れていった。

料理も美味しい。名古屋っぽくなくてごめんね、と微笑む御主人がすべて作るという。すっかりリラックスした私は、勧められるがまま日本酒を頂いていた。美味しい美味しいと飲み進む私に、ダナモさんは「強いですね」と時折笑いかける。

色白で痩せ型、横顔の印象はインドア派。口数は少ないけれど、周囲の会話に対して時折「そうだな」という言葉が耳に残った。彼の声は柔らかく、耳触りが良い。

何度目かに笑いかけられた時、私はこっそり彼に名前を付けた。それが「ダナモさん」だ。もちろん「そうだな」から取つた。たいした秘密ではないけれど、今日まで誰にも言ったことがない。

居心地の良さにひかれ、私は翌日も「悠々」に顔を出した。いや、その後も定休日の日曜以外は毎日、ランチタイムか本営業、どちらかに顔を出すようになった。

奥さんから店で働かないかと言ってもらったのは半月が過ぎた頃。ランチタイムだった。突然で驚いたけれど、断る理由などあるはずもない。隣で食べていたダナモさんも喜んでくれた。私以外で昼夜とも店に来るのは彼だけだ。いつもシンプルで

カジユアルな格好なので、勝手に自営業だと思っ
ているが本人に尋ねたことはない。あまり知りたく
ない、というのが本音だ。私がダナモさん
について唯一知っているのは、彼が私の先
輩、つまり二年前の一見客だったというこ
とだけ。

意識している、という自覚はある。ある
けれど、私には東京から引越してきた理
由もある。そして、東京から転送されて
きた男の年賀状もある。まさか向こう
から住所を教えてくださいとは思わな
かった。

あけましておめでとうございます／今年
もよろしくお願ひいたします

バカみたいだ。抜け殻つてこうい
うことなんだな、と虚しくなつて、初
めて涙が出た。

いきなり乗り込んだりはしないけど、
一度実際に行つてみよう。住所を知る
前はそんな風に意気込んでいたが、い
ざ知つてしまふと話は別だ。まずは自
分が落ち着かないと、と言い訳めいた
理由を持ち出し、時間を稼ぐことにし
た。

津島に来て三ヶ月、「悠々」で働
き出して二ヶ月半。もうすつかり春め
いてきた。少し、時間を稼ぎ過ぎたよ
うな気がする。

※

働き出して二つの変化があつた。まず
は呼び方。御主人の提案で下の名前、
「ミサト」で呼ばれるようになった。
ミサトちゃん、なんて呼ばれるのは小
学生の時以来だ。少し恥づかしい。

もう一つは、顔。客だった時は、な
かなか真正面から顔を見ることも見
られることもなかった。どうやら私
は「ネコ顔の美人さん」らしい。お愛
想だと分かつていても照れくさい。

ちなみにダナモさんはイヌ顔だつ
た。特に一杯目のビールを飲んだ後、
顔をくしゃくしゃにする瞬間がイヌ
つぼくて私のお気に入りだ。

店主夫婦が大阪にいる娘を訪ねる、
という計画は私が働き出した直後から
あつた。時期は人が一段落する四月
の中旬、店は休む予定だつた。私は料
理を作れない。けれどある晩、常連
客たちの少々悪ノリ気味の提案もあ
り、新人のアルバイトに任せてみよう
という流れになつてしまつた。

「まだ私、二ヶ月ですよ」

そう断つてみたが、もう話が決ま
つていことは雰囲気で見分かる。

当の店主夫婦は満更でもなさそう
だし、何よりダナモさんが微笑みなが
ら領いていた。大丈夫、大丈夫。そ
んな声が聞こえるように、何だか心強
かつた。だから思い切つて覚悟を決
め「では頑張つてみます！」と宣言
してしまつたのだ。

その日が来た。

朝、名古屋まで一緒に行き、新幹
線に乗る店主夫婦を見送つ

た。いつもよりも早く起きたので少し眠い。分かりづらいから、という奥さんの警告どおり、名鉄の乗り場へ戻るのがに迷ってしまった。エレベーターに乗ってキョロキョロしながら、ふと名古屋駅で降りるのは初めてだと気付く。

あの男の家まで、歩いて十分弱——。そう浮かんだが、実際に行こうという気持ちにはならなかった。それどころか、思い浮かべた男の顔に違和感がある。本当にこんな顔だったわけ、としっくりこない。けれどその違和感も、電車の中でウトウトするうち散り散りになってしまった。

ランチタイムの準備をしようと店に立ち寄ると、表のホワイトボードに大きく「本日、夜は乾き物のみ！」と書かれていた。御主人の字だ。それを見て思わず笑った時から、私自身もどこか弾んでいたのかもしれない。あつという間に時間が過ぎていた。夕方四時半。開店と同時にカウンターは全席埋まってしまったので、補助の椅子を三脚全部出したがそれでも足りず、一時は立ち飲みをもらう程の盛況だった。普段カウンターだけで足りているのが嘘みたいだ。

スルメ、柿ピー、缶詰。いつもとは比べようもない簡単なつまみだが、みんないつもと同じく楽しくそうに飲んでいる。ダナモさんは一番乗りだった。カウンターの一番奥でスルメ片手にビールを飲みながら、たまに「そうだなも」と呟いている。やっ

ぱり彼はイヌ顔だ。

それにしても混んでいる。火も使っていないのに店内は明らかに暑い。暖房を消したがそれでも追いつかず、冷房に切り替えてもみんなの顔は汗ばんでいた。

「ミサトちゃんの人徳だがね」

みんなのお愛想を真に受けたわけではないが、こんなに短期間で居場所が出来た幸運を密かに嘯みしめていた。

この三ヶ月間、新しい生活に慣れようと精一杯で、追いかけてきた男について思い悩む暇はあまりなかった。今朝みたいたことが何度か続くうち、完璧に彼の顔を忘れてしまうのだろうか。もしかしたら私は脱皮したのかもしれない。

「のお、ミサトちゃんの人徳だがね？」

そんな声に、ダナモさんはいつもより大きな声で「そうだなも」と応じている。

あつという間に九時になった。ようやくカウンター席だけで間に合うようになり、溜まっていた洗い物を片付けようとした瞬間、みんなが「じゃあ、お会計」と帰り支度を始めた。

一時間早いけど……。そんな顔をしているのは私だけではない。ダナモさんもだ。呆気にとられた若輩者二人をからかうように「ええから、ええから」とみんな会計を済ましては席を立つ。いや、ただ席を立つだけでなく、ダナモさんのことを私

に教えてくれる。

私と同じく元々は東京に住んでいたこと、個別指導の学習塾で先生をしていること、私が働くようになってから店に来る回数が増えたこと……。ダナモさんは否定するでもなく、瓶ビールを呑んでいる。少し顔が赤い。

そして常連客たちは、今度二人で天王川公園へ行くように、と勧めてきた。そろそろ「藤まつり」が開催されるという。立派な藤棚が夜はライトアップされて綺麗だからと口を揃え、日曜ならこの店も休みだから、と提案してくれる。急な展開に「いや、でも……」と慌てる私に、「おやすみ！」と笑いながら手を振り、とうとう全員帰ってしまった。

店には私とダナモさんだけ。どうやら人生の先輩方が示し合せ、気を回してくれたらしい。

疲れたので洗い物は明日にしようかな、と私の方から口を開いた。多分この人はルールを守って十時には帰る。もっと話があった。

「塾の先生だったんですね。知らなかった」

「まあ、うん」

「あと東京からって」

「ええ……」

ちよつと表情が曇った気がした。慌てて「実は私……」と、誰

にも言っていない津島に来た理由を伝える。

少し前に男と別れたこと、彼は新しい女が住む名古屋市内に引っ越してきたこと、その後を追いかけて来たが、同じ市内ではストーカーみたいだから津島市に住み始めたこと。

「……こんな話、ひきますよね？」

そうだなも、と言うかと思ったが「いや、全然」と彼は微笑んだ。さっきの少し曇った表情が浮かぶ。実はダナモさんも、私みたいな理由で津島に来たのかもしれない。

互いにその後は何も話さなかった。テレビから流れてくるニュースを聞きながら、彼は一度だけウーロン茶を注文した。私から「藤まつり」の話は、やっぱりできなかった。それは何となく怖い。

十時になる少し前に、ダナモさんはお会計を済ませた。席を立つ寸前、残っていたウーロン茶をぐいっと飲み干し、「ミサトさん」と私の名前を初めて呼んだ。驚いて、うまく声が出ない。「あの、藤まつり、天王川公園の……。一緒に行ってもらえませんか？」

そうだなも、と言えはよかったのだが、慌てた私は妙に大きな声で「はい！」と返してしまった。

顔をくしゃくしゃにして笑っている彼は、やっぱりイヌ顔だ。

(了)